

桂川災害復旧助成事業関係文化財調査報告

荷原地神塔

福岡県文化財調査報告書 第276集

2021

九州歴史資料館

序

本書は、桂川災害復旧助成事業に伴い実施した、朝倉市上組に所在する石塔の調査報告書です。

平成 29 年 7 月に発生した九州北部豪雨は朝倉市及び東峰村を中心として各地に甚大な被害を及ぼしました。30 名を超える死者や行方不明者を出す人的被害の他、多くの家屋の全半壊や床上浸水など、自然災害の脅威を目の当たりにさせられました。

桂川災害復旧助成事業は九州北部豪雨により被災した荷原川の改修に伴うもので、早期の事業着手が望まれていました。

今回の調査では、「地神塔」1 基を調査しました。本塔は地元で大切にされており、本事業に伴い石塔本体の移築が決まっておりましたが、基壇石組みの下部に地下遺構が存在する事が想定されたため、工事に伴い調査を実施することとなりました。

大規模な災害はいつ、どこで発生するかわかりません。人だけではなく、長い歴史を刻んだ文化財もまた、被害により滅失の危険にさらされています。国民共有の財産である文化財を守り伝えるため、引き続き調査研究を進めてまいります。

本書が教育、研究、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。なお、本調査に際してご協力・御助言いただいた関係各位に深く感謝いたします。

令和 3 年 3 月 31 日

九州歴史資料館

館長 吉田 法稔

例 言

1. 本書は、令和元年度に桂川災害復旧助成に伴い、九州歴史資料館が実施した荷原川地神塔の発掘調査の記録である。
2. 現場作業および整理作業、報告書作成は福岡県朝倉県土整備事務所災害事業センターの執行委任を受けて九州歴史資料館が実施した。
3. 本書に掲載した遺構写真の撮影は、九州歴史資料館文化財調査室の森井啓次および委託を受けた（株）島田組が行った。
4. 本書に掲載した遺構図は測量業務を受託した（株）島田組による。
使用機材 GNSS 測量機 ニコン・トリンプル Trimble R8-Model3
4 級基準点測量機 ソキア FX
空撮用 UAV DJI Phantom 2 Pro
写真撮影 SONY a 5100
5. 遺構図面や写真等の記録類は九州歴史資料館において保管している。
6. 本書の執筆および編集は森井が行った。

目 次

1. はじめに	1
2. 遺跡の位置と環境	2
(1) 調査地の地理的環境	2
(2) 調査地周辺の遺跡	3
3. 調査の内容	5
(1) 調査の経緯	5
(2) 調査の概要	5
4. おわりに	7
(1) 周辺の石碑、石塔について	7
(2) 荷原地神塔の築造年代について	8
(3) おわりに	8

図版目次

- 図版1 1 調査地遠景（南から）
2 地神塔と上組集落（南から）
- 図版2 1 地神塔（正面から）
2 地神塔全景（背面から）
- 図版3 荷原地神塔オルソ図
- 図版4 1 調査風景
2 石塔移築作業
3 石塔移動後の基壇
- 図版5 1 基壇除去状況
2 荷原川河岸断面
3 復旧工事終了後

1. はじめに

平成29年7月5日から6日にかけて、対馬海峡付近に停滞した梅雨前線に向かって暖かく非常に湿った空気が流れ込んだ影響等により、線状降水帯が形成・維持され、同じ場所に猛烈な雨を継続して降らせた事から、九州北部地方で記録的な大雨となった。総降水量が多いところで500ミリを超え、7月の月降水量平年値を超える大雨となったところがあり、福岡県朝倉市や大分県日田市等で24時間降水量の値が当時の観測史上1位の値を更新するなど、これまでの観測記録を更新する大雨となった。これを「平成29年7月九州北部豪雨」と呼び、特に福岡県内では朝倉市及び朝倉郡東峰村を中心とした地域では30名を超える死者や行方不明者を出す人的被害の他、多くの家屋の全半壊や床上浸水など、甚大な被害が発生した。あわせて水道、電気等のライフラインの他、道路や鉄道、地域の基幹産業である農林業にも甚大な被害が生じた。河川の被害は激しく、朝倉市では桂川が氾濫し、水害の猛威を改めて理解させられる事となった。

福岡県では、被災直後から被災地復興のための各種の事業や支援を直接・間接的に継続している。今回の文化財調査も、災害の復興支援の一環として、失われる文化財を事前に調査し、記録として保存するために行うものである。

調査の組織

発掘作業から整理作業・報告書作成にかかる関係者は以下のとおりである。

	令和元年	令和2年
朝倉県土整備事務所		
災害事業センター		
センター長	喜多島礼和	北野 靖
災害事業調整課長	佐々木大介	益田光博

事業調整係長	佐藤八宏	伊藤崇陣広
技術主査	守真武宏	守真武宏
災害河川第二課長	平井賢二	
災害河川第一課長	野田充紀	
河川第二係長	福田幸司	溝田 悟
技術主査	溝田 悟	

九州歴史資料館

館長	杉光 誠	吉田法稔
副館長	安永千里	安永千里
総務室長	中村満喜子	伊藤幸子
総務班長	畑山 智	畑山 智
事務主査	林田朋子	古賀知香
主任主事	古賀知香	
主事	具志堅靖知	田中佑弥 具志堅靖知
文化財調査室長	吉村靖徳	吉村靖徳
文化財調査室長補佐	伊崎俊秋	伊崎俊秋
文化財調査班長	森井啓次	森井啓次
参事補佐		小川泰樹（整理担当）

調査の実施にあたっては朝倉県土整備事務所災害事業センターの関係者、朝倉市教育委員会の文化財担当である中島圭氏に様々なご協力をいただきました。また、朝倉市の石造物調査の内容については甘木歴史資料館の国生知子副館長と池田早貴氏にご教示いただきました。記して感謝いたします。

2. 遺跡の位置と環境

(1) 調査地の地理的環境

朝倉市は北を三郡山地系の山々によって筑豊地域、南を筑後川によって筑後地域と区切られる。地形的には、筑後川の支流であるいくつかの小河川が山を開削し、所々に谷底盆地を形成させながら、扇状洪積台地（朝倉扇状台地群）を形づくっている。筑後川およびその支流によって開削あるいは沖積された肥沃な低地平野は、古くから多くの集落を形成し、水田として利用され、人々の生活を豊かにしてきた。一方で大雨等により山麓は土石流、河川沿いは氾濫などで度重なる自然災害の猛威を受けてきた場所でもある。

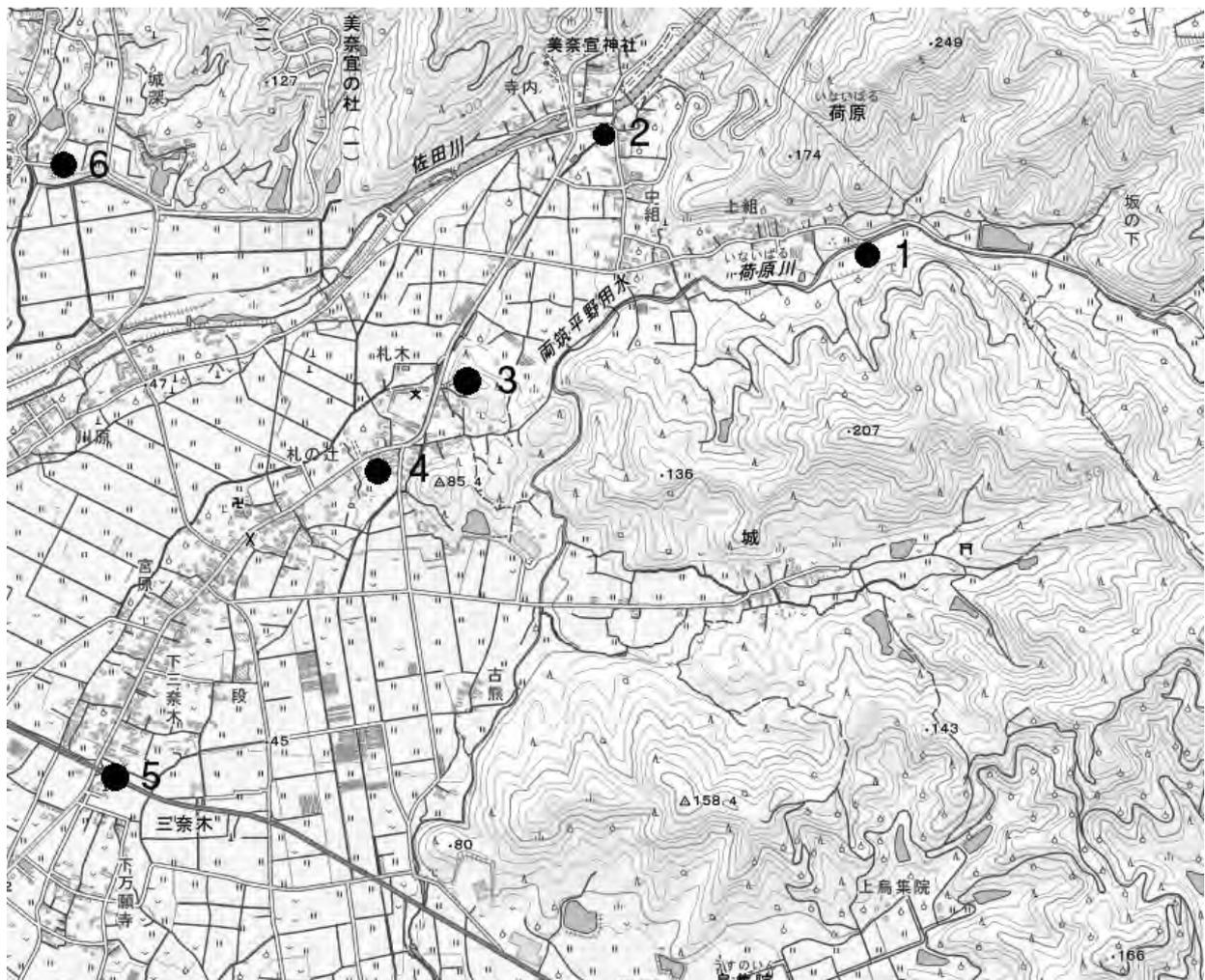
本調査地の荷原（いないばる）川は、城・鬼ヶ城の山々に源を發し、中島田で桂川と合流して筑後川へと注ぐ、総延長 8,865 m の小河川である。水量も決して多くはないが、上ノ原、入地、三寺、乙王丸、石成、善光寺、立出の各地区で用水として使われており、利用度は高く、福岡県が管理する筑後川水系の一級河川である。

本川の一部は人口的に開削された河川（岩切堀川、地元では「瓢箪堀」と呼ばれている）となっており、今回の災害復旧に伴い、調査を実施している（福岡県文化財報告第277集）。

（2）調査地周辺の遺跡

調査地周辺では、古代より多くの人々が生活していた痕跡が認められているが、紙面に限りがあるため、本書では調査した地神塔に関係する時期である近世以後の状況について簡略に記述する。

近世の三奈木地区および下座郡の大半は福岡藩家老黒田家の知行地である。福岡藩内の大身は藩の確立期に次々と取り潰しを受けたが、三奈木黒田家は逆に加増され、藩の家老としての地位を保ち続けた。所領の大半が下座郡三奈木村にあったことから、三奈木に別邸を構えたほか、家臣を下座郡内に居住させていた。荷原村は三奈木村の北東に隣接する位置にあり、三奈木黒田家初代の美作一成の知行地であることから、両村は強い関係があり、周辺の村に比しても有力な位置にあったと考えられる。



第1図 周辺遺跡分布図（1/20,000）

- 1 荷原地神塔 2 三奈木弥平次が宅跡 3 岩切山城 4 三奈木黒田家庭園 5 三奈木段ノ裏遺跡
6 黒田図書助直之宅跡

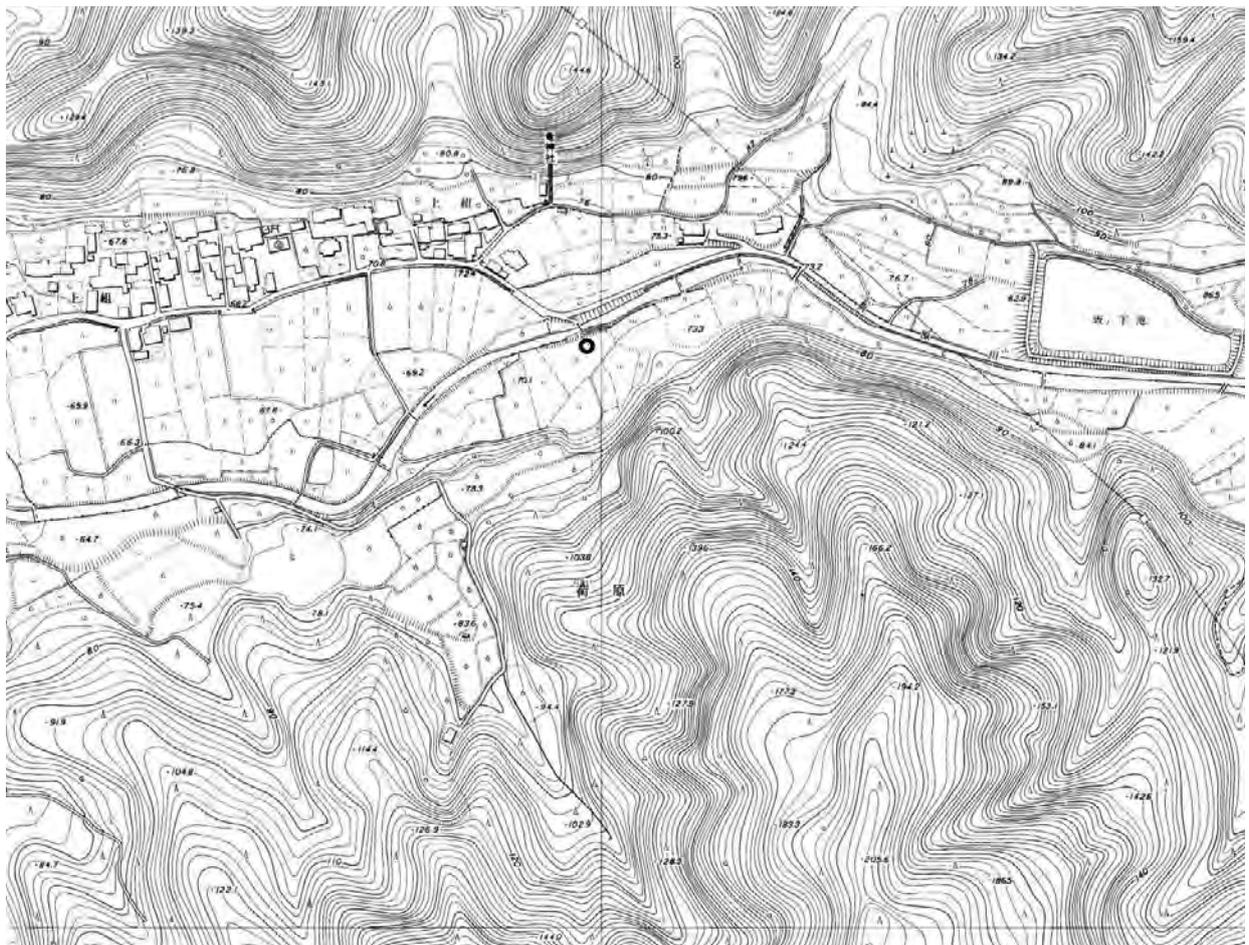
福岡藩領で黒田家の知行地であった三奈木には領地経営の中心として黒田家の別邸が置かれ、御茶屋と呼ばれた。黒田本家との混同をさけるため、三奈木黒田家と称し、初代一成から幕末の11代一美まで続いた。幕末まで藩一の家禄を保持し、藩内で唯一万石以上の石高を有する家臣として存在するとともに、代々家督を継ぐと同時に黒田家筆頭家老職に就任した。黒田藩随一の勢力を誇った別邸内には庭園が造られ、園地には水が引かれていた。建築の大部分は明治期に解体され、残された庭園は甘木市教育委員会（当時）において平成12・13年度に発掘調査が行われた後に整備され、公開されている。

三奈木段ノ裏遺跡は国道386号バイパス建設に伴い甘木市教育委員会（当時）において平成12年度に発掘調査が実施され、中世から近世にかけての遺構が確認された。近世にかかる遺構としてL字状に屈曲する溝が検出され、17世紀代の陶磁器類が出土している。遺構の性格は明らかにされていないが、当地域を治めていた三奈木黒田家の家臣が周辺に居住していたことから、その関係性が想起される。

甘木市史編さん委員会 1981「甘木市史 下巻」

甘木市教育委員会 2003「柿原堂ノ前遺跡 三奈木段ノ裏遺跡」甘木市文化財調査報告書第58集

甘木市教育委員会 2003「旧三奈木黒田家庭園」甘木市文化財調査報告書第60集



第2図 調査地周辺地形図（1/5,000）○が荷原地神塔

3. 調査の内容

(1) 調査の経緯

今回の調査は、平成29年に発生した北部九州豪雨災害の復旧工事に伴うものである。工事に先立ち、朝倉市教育委員会において対象地の確認をしたところ、災害復旧のために実施する河川拡幅の範囲に石塔1基の存在を確認した。

朝倉市教育委員会と福岡県教育委員会、九州歴史資料館の三者で遺跡保存についての協議を行い、本遺跡が地域にとって重要な遺跡であると認識した。その結果をもとに、荷原川の復旧工事を実施する福岡県朝倉県土整備事務所災害事業センターの関係部署と遺跡の現地保存を含めた取り扱いについて協議を実施した所、本事業が災害復旧及び今後の災害防止のために行う事業であり、工事の内容から原位置での保存は困難との結論を得た。石塔本体に関しては所有者が工事地外へと移設する事で協議が整っていたが、石塔を建立する際、地下に鎧を埋納したとの伝承があり、これに伴う何らかの地下遺構の存在が想定されたため、周辺工事の進捗を鑑みながら文化財調査を実施し、記録保存を行うこととした。

調査の実施にあたっては、朝倉市教育委員会では市が実施する災害事業関連の発掘調査が多数予定されており、早期の実施が困難である事から協議の上、災害事業センターの執行委任を受け、九州歴史資料館が担当することとなった。

(2) 調査の概要

調査は工事期間との調整から現況の測量調査を主とし、地下遺構の確認は石塔の移設工事と並行して、遺構が確認された場合に速やかに記録保存が行えるよう体制を整えた。写真測量は令和元年12月20日、地下遺構確認のための工事立会は令和元年12月23日から開始したが、後述するように地下遺構が確認されなかったため、当日に写真記録を行い、現地での調査を終了した。

現地は荷原川の左岸、畑地の真ん中に築かれている。耕作も地神塔を避けて行われており、地元で大切に信仰されている様が認められる。

地下遺構の存在を確認するため、石塔移設に合わせ、12月23日に現地立会を行った。移設に先立ち所有者により供養を行い、重機により石塔本体を移動させた後、重機及び人力で基底部となる積石を除去した。全ての石材を除去し表面観察をしたところ、土坑が掘られている様子ではなかったが、地元では武器類を埋納したとの伝承があったため、念のために地下遺構の有無を確認するために重機により慎重に掘削を行った。旧地表面直下は河原石を多量に含む礫層で、河川周囲と全く同一の状態であり、地表下約2.0mまで掘削したが、人為的な造作は認められず、埋納遺構の存在はないと判断した。

遺物に関しても、直近まで使用されていた現代の花立用の陶器壺1点と積石の表面に清涼飲料水の王冠1点が見られたのみで、塚内やその地下に至るまで、土器片の欠片も認められなかった。

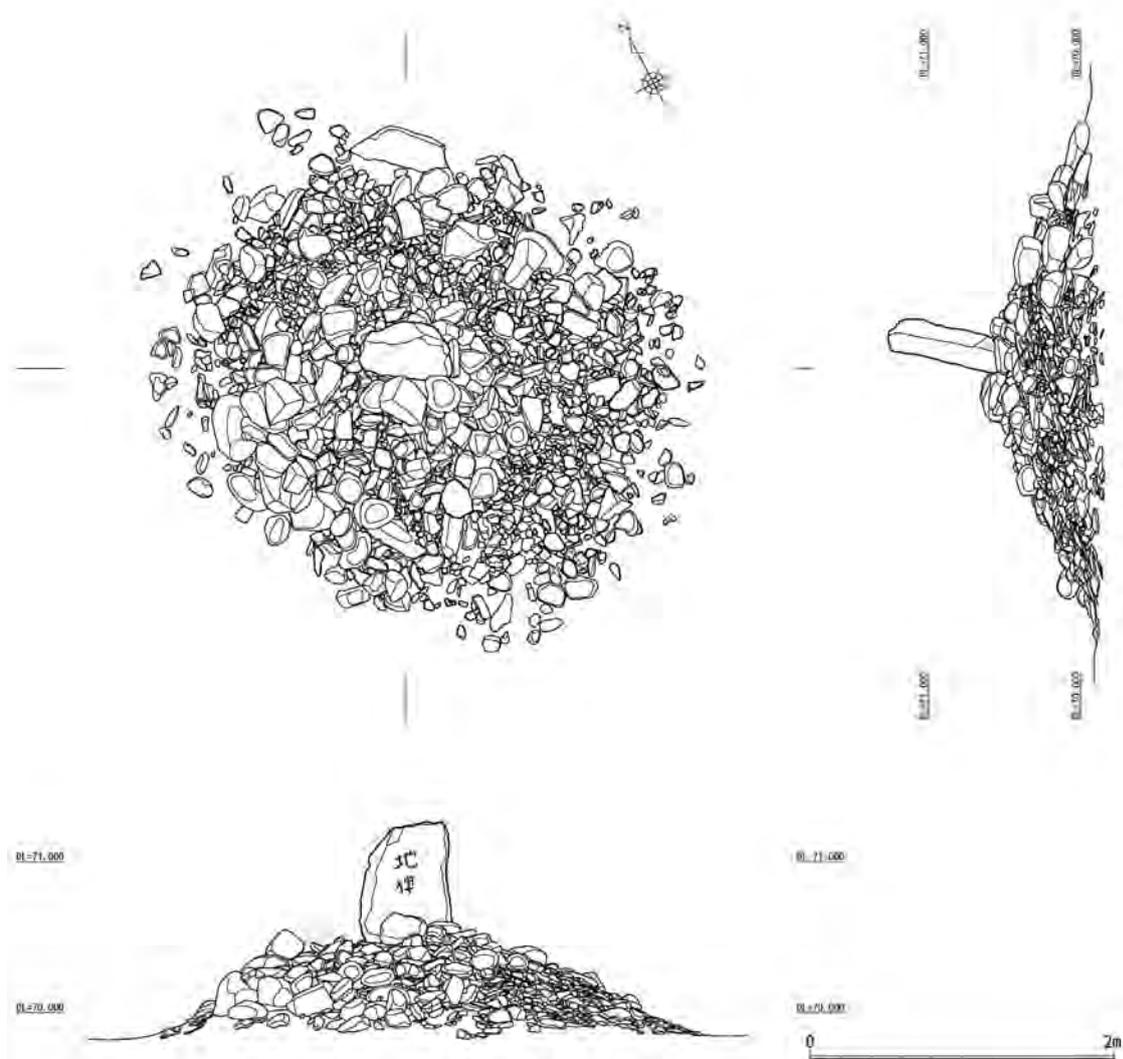
地神塔

石塔は高さ0.8m、幅0.36～0.56m、厚さ0.22mを図る。自然石を粗く加工し表面に「地神」の文字が陰刻されるがやや読み取りにくい。いわゆる「文字塔」に分類されるが、「地神」以外

の文字はなく、建立した人名や年号、碑文は他には認められない。

基壇は河原石の積石からなる。平面はほぼ円形で東西 3.0 m、南北 3.0 m、高さ 0.68 m を図る。積石は若干崩れがみられるものの、概ね築造時の原型をとどめているものとみられる。基底部周辺に比較的多きめの石材を配置して根固めを行い、それより小ぶりの河原石を積むことで積石塚状を呈する。中は土を交えた小石で塚状の基壇を形成している。石塔正面に用いられる石材が若干大きい、意図的なものかは不明である。旧地表面付近を観察した所、若干ではあるが焼土状に赤変した範囲が見られ、築造時に表土面で何らかの地鎮行為が行われた可能性が想定される。先述したとおり、基壇下には地下遺構は存在しない。

本例のような「地神（じじん）塔」は地神（堅牢地神）を祀るために造られた石塔で、西日本では岡山県と香川県に多く分布し、天明の飢饉（1782～1788）以後、文化文政期（1804～1830）に地神塔の建立が広まったとされる。明治期までは建立が続くが、大正期以後は見られなくなる。



第3図 荷原地神塔実測図（1/50）

4. おわりに

(1) 周辺の石碑、石塔について

朝倉市教育委員会（甘木歴史資料館）において、庚申塔を中心に市内で建立された石造物の分布調査を順次行っている。「甘木市史」下巻によれば、市史編纂時には旧甘木市内には163基の庚申塔が確認されており、その後の追加調査で数10基が追加されている。その内、今回調査対象となった荷原地区の周辺には以下の例が確認されている。

- ・「猿田彦大神」寺内（三奈宜神社入口）明和5（1768）年
- ・「庚申塔」中組（老松神社境内）宝暦2（1752）年
- ・「猿田彦大神」中組 明和5（1768）年
- ・「猿田彦大神」坂の下 明和5（1768）年
- ・「庚申塔」鬼ヶ城 享保14（1729）年
- ・「庚申尊天」坂の下 享保15（1730）年
- ・「猿田彦大神」帝釈寺 年号不明

荷原集落は彦山街道に沿いに位置し、上組、中組集落は英彦山参詣者の宿場町機能を有していたとされる。庚申塔の信仰については、山王権現の信仰との結びつきが考えられており、天台宗との強い関わり合いをもった英彦山修験者の関与が指摘されていることが何らかの関係があるだろう。この他、集落内では恵比寿神の石造も数か所みられるのも、宿場としての機能をもっていたことが関係しているのかもしれない。近代社格制度に基づき、明治末から大正初期にかけて神社庁からの指示で、無各社の合併が行われた際に、村落の辻々に散在していた庚申塔などの石造物を一括して神社境内に移築したとされる。とすれば中組と坂の下例は原位置を保っている可能性があるが、三奈宜神社や老松神社例は後世に移築されたものであろう。

一方で地神・地主神の例は少なく、旧甘木市内全域で6基、内三奈木地区は1基のみである。地域特性によって信仰の対象が異なる事がわかる。



写真1 「猿田彦大神」中組



写真2 「猿田彦大神」坂の下

(2) 荷原地神塔の築造年代について

本調査は災害復旧工事に伴い実施された。調査の概要で記述したとおり、本石塔は表面に「地神」が陰刻されたのみであり、築造年代を示す銘文はない。出土遺物もなく築造年代を示す手がかりもないことから、明確な年代については明らかではない。全国的な傾向として地神塔は江戸時代後期から明治期にかけての建立が多いことが知られており、本塔もこの範囲内の建立の可能性が想定される。

本地域には先述したとおり多くの庚申塔が建てられているが、庚申塔の多くは年代が刻まれており、建立時期が特定できる。荷原地区周辺の庚申塔は年号不明の1基を除き、享保14年から明和5年までの約40年間という限られた時期で6基が集中的に建立されている。また、上組の集落内を見下ろす山裾上で、地神塔の対岸の位置には竜神社が所在し、地元で信仰されている。竜神社の建立は安永9（1780）年で、荷原地区に庚申塔が作られた時期と近い。明治から大正初期までは日照りが続くと言われ、藁で作った竜を溜池に沈めて祈願したと伝えられる。上組集落での地域信仰が盛んであった時期と考えられ、天明期間の全国的な地神塔建立の流行に際し、本塔を建立したのではないかと考えられる。

(3) おわりに

本来の信仰は場所に伴ってなされるものであり、特に土地に根付いた神を祀る石造物であれば尚の事である。人との結びつきが強い庚申塔や恵比寿像は集落の中に祀られ、農耕という土地との結びつきが強い地神塔は田畑の中で祀られている事が如実にその事実を語っている。しかし、荷原地区で祀られていたと考えられる庚申塔や恵比寿像も本来の位置を保つ例は少ないと考えられ、本来の位置はわからない。地神塔本体は移築され後世へと残されるが、基壇とともに建立された本来の場所もすでに失われた。事前の調査により原位置及び築造当初の形状を記録に留める事ができたのは重要な意味を持つ。

今回の調査は災害復旧に伴う考古学的な緊急調査であったが、近世以後の石造物に関する調査は分布調査程度で、信仰なども含めた歴史的な調査はまだ進展しているとは言えない。今後は民俗的な調査も行い、周辺を含めた同地域の歴史像を明らかにするように進める必要がある。



写真3 工事中の荷原川（上流から）

写真図版

1. 調査地遠景（南から）

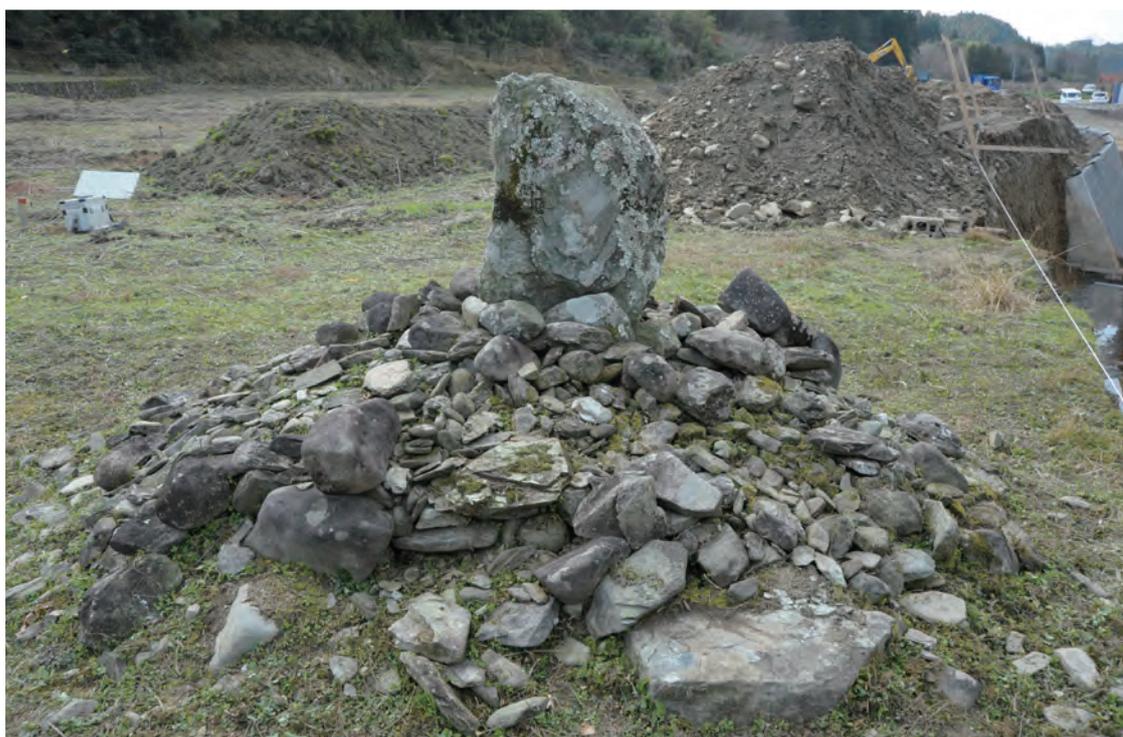


2. 地神塔と上組集落（南から）

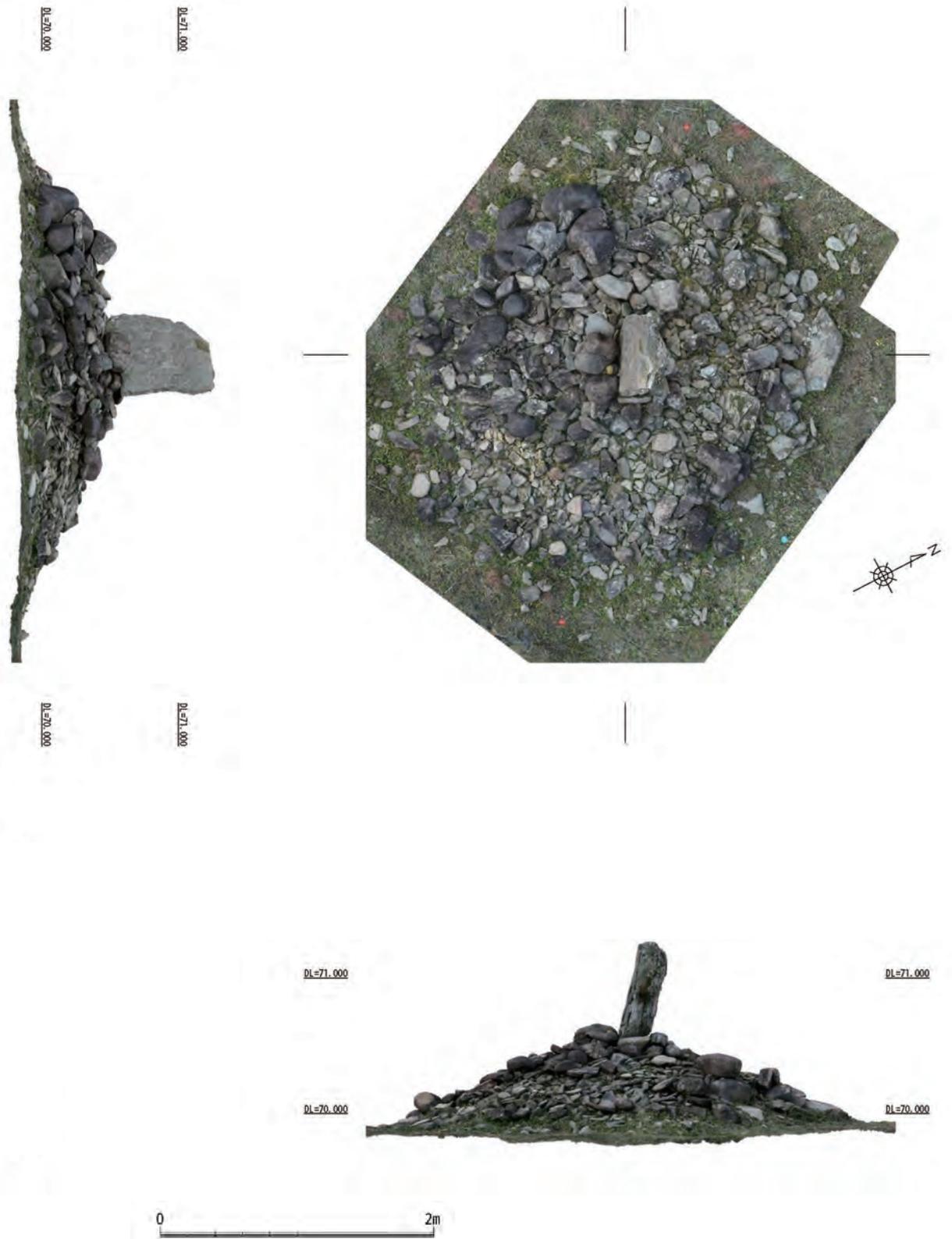




1. 地神塔（正面から）



2. 地神塔全景（背面から）



荷原地神塔オルソ図



1 調査風景



2 石塔移築作業



3 石塔移動後の基壇

1 基壇除去状況



2 荷原川河岸断面



3 復旧工事終了後



報告書抄録

ふりがな	いないばるじじんとう							
書名	荷原地神塔							
副書名	桂川災害復旧助成事業関係文化財調査報告							
巻次								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 276 集							
編著者名	森井 啓次							
発行機関	九州歴史資料館							
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3							
発行年月日	2021 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いないばるじ じんとう 荷原地神塔	ふくおかけ んあさくら し 福岡県朝倉 市 うえぐみ 上組	40228		33° 25' 18"	130° 43' 43"	2019.12.19 ～ 2019.12.23	約 10 m ²	災害復旧
種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
石造物	近 世 ～ 近 代		石塔		なし		積石塚状の基壇上に立つ石塔。 「地神」の陰刻	

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
JH	2120261
登録年度	登録番号
2	5

桂川災害復旧助成事業関係文化財調査報告

荷原地神塔

福岡県文化財調査報告書 第 276 集

2021 年 3 月 31 日

発行 九州歴史資料館
〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3

印刷 株式会社 プリンティングコガ
〒831-0034 福岡県大川市大字一木736-5